



福井市自然史博物館

博物館だより

FUKUI CITY MUSEUM OF NATURAL HISTORY NEWSLETTER



(左から) ハチジョウダカラ、ナンヨウダカラ、(右列上から) キイロダカラ、ハナビラダカラ、メダカラ (スケール: 1cm)

福井の自然史情報

タカラガイの仲間

綺麗な貝の代表とも言えるタカラガイ。子^こ安^{やす}貝の名で安産守りとされたハチジョウダカラ、かつては非常に高値で取引されたナンヨウダカラ、古代中国やインド洋周辺で貨幣として使われたキイロダカラとハナビラダカラ、そして福井の海岸でも拾うことができるメダカラなど、色や大きさの違う様々な種類があります。



当館マスコットキャラクター
「シジュウオ」

中面に関連記事があります。



貝



— 殻をまとった不思議ないきもの —

2025年7月18日(金)▶10月19日(日)

砂浜に散らばる綺麗な貝殻、田んぼに潜むタニシやカワニナ、街中で出会えるカタツムリ、そして食卓に並ぶアサリやシジミ……貝という生き物は、私たちにとって非常に身近な存在です。硬い貝殻をまとい、私たち人間とはまったく違う体のつくりをした貝とは、どのような生き物なのでしょうか。1万点を超える博物館の標本から選りすぐりのものを展示し、貝の魅力に迫ります。

展示のみどころ

1 貝とは何者なのか

軟らかい体と硬い殻を持ち、軟体動物とよばれる貝の仲間。巻貝と二枚貝はどう違うのか、二枚貝の前後左右はどっちなのか、ウニやミズは貝ではないのか、といった基本的な疑問から、貝という生き物について見ていきます。

オウムガイ▶

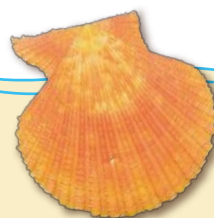


▲ヒザラガイ

2 色と形の多様性

貝は世界に10万種以上、日本だけでもおよそ8000種が知られています。巨大な貝、鮮やかな色をした貝、たくさんのトゲを身にまとった貝など、色も形も多種多様な貝の姿をご覧ください。

ヒオウギ▶

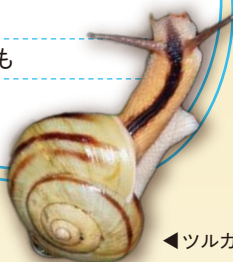


▲ホネガイ

3 川の貝、陸の貝

貝がいるのは海だけではありません。川や池にも多くの貝がいるほか、陸上にいるカタツムリも貝の仲間です。福井県の山や川にも100種以上の貝が生息しており、その中には福井の名がついた貝もいます。

フクイシブキツボ▶

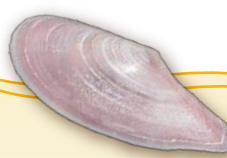


◀ツルガマイマイ

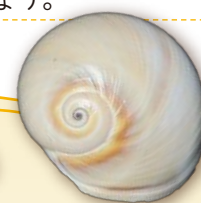
4 福井の海の漂着貝



淡い紅色が魅力的なベニガイ、巻貝なのに巻かないカサガイ、他の貝を食べてしまうツメタガイなど、砂浜にはたくさんの貝殻が落ちています。様々な貝殻を拾い集めて、コレクションしてみましょう。



▲ベニガイ



◀ツメタガイ



古川田溝コレクションの横浜産ハイガイ

石田 惣 (大阪市立自然史博物館)



図1：古川田溝
(文献2より)。

私は2002年から4年間、福井市自然史博物館で海岸生物担当の学芸員として勤務していました。着任してすぐに、当時昆虫担当の学芸員だった長田勝さんから説明を受けたのが、地下の収蔵庫にある「古川田溝貝類コレクション」でした。古川田溝(図1、

1873-1948)は鯖江の開

業医で、貝類を中心とする博物学に造詣の深い碩学の人でした。コレクションは幅広い分類群を網羅し、福井での採集品はもちろんのこと、各地の収集家とも交換しあうことで日本全国の標本が揃っています。高度経済成長期に日本の自然環境は大きく改変され、生き物は少なからぬ影響を受けました。戦前期に活躍した古川のコレクションは、日本で貝という生き物が本来どのような分布をしていたのかを知るうえで、非常に有用な情報を与えます。

鯖江生まれの古川は17歳の時に上京して2年半ほど働き、いったん郷里に戻ってから東京帝大医科大学に進学しました。通算で10年ほどを東京で過ごし、その頃からすでに貝類の収集を始めていたようです¹⁾²⁾。在京中に築いた人脈も手伝って、コレクションには東京周辺の標本がまとまって存在します。例えば海産種では東京湾ですでに絶滅した種もいくつかありますが、その一つは横浜産のハイガイです(図2)。ハイガイは亜熱帯域を中心とする泥質干潟に生息するフネガイ科二枚貝で、古くから食用にされ、殻が厚いため化石や貝塚遺物として残りやすい特徴があります。今より温暖だった縄文時代早期には、函館以南の日本各地に分布していたことが貝層や貝塚の記録からわかっています。東京湾沿岸の同期の貝塚でも優占種の一つです。その後気候が寒冷になり、関東以北では姿を消します。ハイガイが好む内湾奥部は、港湾や埋立地として開発されやすい場所でもありました。昭和以降の干拓や埋立てにより生息地はさらに失われます。1970年代までに本州・四国ではほぼ絶滅し、現在の生息は有明海、八代海、伊万里湾などに限られます³⁾。

件の横浜産ハイガイは「大正三年十一月十九日松野氏ヨリ寄贈」とあることから、1914(大正3)年以前の採集と推定されます。注意しなければならないのは、貝層や貝塚から洗い出されたもの、あるいは古い死殻を拾った可能性です。

この標本は合弁(左右の殻が揃っている)で、殻を覆う殻皮が残っています。また、殻縁の内面に泥が付着していますが、ハイガイは外套膜縁沿いに泥を含むことが多く、生きた貝を肉抜きするとこのような泥の痕が残ることがあります。これらの殻の状態から、この標本は採集時生貝だった可能性が高いと私は考えています。明治~大正期の東京湾でハイガイの生息を記録した文献を、私は寡聞にしてまだ見つけられていません。1933年に貝類学者の瀧田がまとめた

「横浜附近の軟體動物目録」にハイガイは出てきますが、既知産地は横浜貝塚としており、「当地方産としては考慮を要する種」というカテゴリに入れられています⁴⁾⁵⁾。この標本をもって当時ハイガイがまだ東京湾に生息していた、と結論づけるのは慎重であるべきですが、極めて重要な資料であることは間違いないでしょう。

ところで、寄贈者の松野氏とは誰でしょうか。標本のデータベースで検索すると、同じ寄贈日でラベルに「松野重太郎氏」と書かれた標本もありました。おそらく当時の横浜で名が知られる植物学者の松野重太郎(1868-1947)でしょう。古川は在学中に植物にも関心を持っており¹⁾²⁾、交流があったと思われます。ハイガイと一緒に寄贈されたのは横浜産のアカガイ、サルボオ、ケガキ、オオノガイ、ウチムラサキ、カガミガイ、オキシジミ、オニアサリ、アサリ、マテガイ、バカガイ、シオフキ、トリガイです。いかにも潮干狩りで採れそうなものばかりで、このような状況もまた、生きたハイガイが横浜にいたのでは、という想像を膨らませるのです。

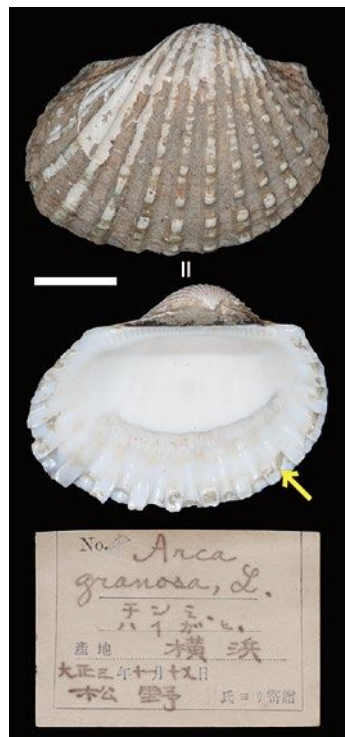


図2：横浜産ハイガイ(FKC4985)。バーは1cm。黄矢印の先が泥の付着痕。チンミはハイガイの別名。

参考文献：1) 窪田彦左衛門編，1962，福井市立郷土博物館所蔵 貝類標本目録，福井市立郷土博物館；2) 窪田彦左衛門，1951，ゆめ蛤(60)：18-20；3) 日本ベントス学会編，2012，干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック，東海大学出版会；4) 堀越増興・板橋義美編，1994，神奈川自然誌資料(16)：17-28；5) 堀越増興・板橋義美編，1996，神奈川自然誌資料(17)：81-86。



フォトコンテスト 「お花のレストラン@福井」 開催中です！



ツバギとメジロ

ミチノクフジュソウと
ハエ

当館では、来年2026年春に開催予定の特別展「知ってるほど、花の戦略（仮）」の企画として、フォトコンテストを開催しています。募集する写真は、福井県内で撮影した、花に昆虫や鳥などが来ている写真です。色鮮やかな花、良い香りの花、地味な花、臭い花、変わった形の花は、それぞれ異なる戦略で昆虫や鳥を招いて花粉を運んでもらうことで子孫を残してきました。花に訪問者がいる、そんな貴重な場面に出会えたら、そっと写真に残しフォトコンテストにご応募ください。

入賞作品10点は特別展で展示させていただくほか、豪華プレゼントも用意しております。SNS (XとInstagram) での投稿と当館宛てのメールにて、

11月30日まで随時受け付けております。応募方法など詳細の情報はQRコードからご覧ください。



新職員紹介



学芸員

永田 祐基
Nagata Yuki

福井が大好きで静岡からやってまいりました、永田と申します。豊かな自然を五感で味わい、素敵な人々に囲まれ、毎日が幸せいっぱいです。天文を通じて、星々と皆様との橋渡しができるよう努めてまいります。自然をまるごと楽しめる市中のオアシス足羽山で、皆様をお待ちしております。

また、にぎわう福井駅には博物館分館のセーレンプラネットがあります。ぜひ充実の展示と迫力のドームシアターをお楽しみください。



主幹

塩谷 明日香
Shiotani Asuka

自然史博物館に配属され早や3か月。苦手な虫たちも、実物や標本を間近で見ると生感が気になったり、かわいく思えたり…自然の不思議、面白さ、美しさ、日々たくさんの発見があります。

当館では常設展に加え、年間を通じて楽しいイベントを行っています。また当館がある足羽山は、市街地では見かけない鳥や昆虫、植物などの宝庫であり、一息つける茶屋やカフェもあります。素敵な休日を過ごしに、足羽山へ遊びに来てください。

《あとがき》

今号では、7月18日から開催の第93回特別展「貝一般をまとった不思議な生きもの」の見どころを紹介し、リレーエッセイでも貝類のコレクションについての話題を取り上げました。砂浜に行くと目にする様々な形や色の貝殻。皆さんも、一度はつい夢中になって綺麗な貝殻を探したり、お気に入りの貝殻を持ち帰った経験があるのではないでしょうか。今回の特別展では、なかなかお目にかかれない大きいサイズの貝殻や色鮮やかな貝殻が展示されています。福井県には砂浜がたくさんあるので、特別展をきっかけに新たな視点で貝殻集めをしてみたいはいかがでしょうか。（柴田）

《交通案内》

【自家用車】

●福井駅西口から約10分、福井ICから約20分（駐車場あり）

【バス】

●福井駅西口のりばから京福バス（73・74系統）
●足羽山公園下で下車 徒歩10分

【電車】

●福井駅で下車 徒歩30分
●福井鉄道福武線 足羽山公園口・商工会議所前駅で下車 各徒歩20分

《ご利用案内》

開館時間 ●午前9時～午後5時15分（入館は午後4時45分まで）
休館日 ●月曜日（祝日は開館）、祝日の翌平日、年末年始

入館料 ●高校生以上100円（20名以上の団体は半額）
中学生以下、70歳以上、障がい者および付添の方は無料

